

内藤莞爾の社会学 その4

——総括：内藤社会学に通底する比較宗教社会論——

三浦典子

1. はじめに

内藤先生は、九州大学を定年退職される直前に心臓病に倒れられた。入院先の病院にお見舞いに行くと、先生の病室がたまたまエレベーターの近くにあり、エレベーターの開閉時に鳴る「チン」という音が、死者のために枕経を読みに来られた僧侶のたたき鐘の音かと思い、ヒヤッとするとおっしゃられていた。

先生は在職中何度も大病にかかられたが、その病魔も追い払われ、医師の立会いの下で、昭和 55 年 3 月に最終講義の時を迎えられた。最終講義のタイトルは「末子相続事始」で、長年取り組まれてきた末子相続の研究にちなんだものであった。

退職後は立正大学に迎えられ、内藤先生の言われる末子相続の「ベルト地帯」から遠く離れることもあり、健康的にもフィールドに出かけて調査研究をすることも難しくなり、内藤莞爾の社会学は、研究方法や研究分野を大きく転換せざるをえなくなった。

立正大学では、新明正道先生の後任として「理論社会学」の講座を担当されることになり、「私は理論社会学者の器ではないので、フランス社会学史を手がけてみる」ことにされ、フランス社会学との縁が再び生まれたと述べられている¹⁾。

先生は、旧制静岡高等学校でフランス語を第 2 外国語として専攻され、フランス語を選択する旧制高校生が少なかったこともあり、東京大学入学後は、フランス語が堪能であることで重宝されたとのことである。

当時の東京大学文学部社会学研究室には、ドイツ語グループとフランス語グループがあり、フランス語グループには田辺寿利や古野清人がおられ、両者は日本におけるフランス社会学とりわけデュルケム学派の研究の草分け的存在であった。彼らの影響を受けたことは当然で、内藤先生のフランス社会学との縁は、東京大学の学生時代に始まることになる。

2. 九州大学への導き

しかしながら内藤先生が昭和 15 年 3 月に提出された卒業論文は、「近江商人と浄土真宗」のかかわりに関する論稿で、周知のように、ドイツの社会学者 M. ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に触発されたものであった。この論文は、学生の卒業論文でありながら「宗教と経済倫理——浄土真宗と近江商人——」として、『年報 社会学』第 8 輯（1941）に収録された。

R. N. ベラーの「徳川時代の宗教」（1956）の、第 5 章 2 節「商人階級の経済倫理」²⁾は、内藤先生のこの論文を参考にして執筆されていることはよく知られた事実であり、それ以外にも、多方面に反響を呼んだ。

内藤先生の言葉によると、この論文が予想外の評判(?)となり、古野清人先生の知遇を得たとのことである。九州大学社会学研究室への就任は、当時、九州大学文学部の宗教学教授であった古野先生の引きが大きかったことが推測される。「1950年に九州大学に移ることとなったが、九州移籍に関しては複数の人脈があったが、最大は古野清人氏との因縁である」と述べておられる³⁾。

古野清人は、福岡県、現在の宗像市の出身で、外交官を志して東京大学法学部に入学したが、文学部社会学科に移ったとのことである。しかし当時の社会学科はA. コントの東洋版ともいわれる建部遯吾の時代で、ある意味で社会学に失望して、宗教学・宗教史学科に転じたという。ところが当時の宗教学・宗教史学科の重鎮の姉崎正治の宗教学が、個人主義的宗教経験を柱としていることに飽き足らず、古野は友人の田辺寿利の勧めもあって、フランス社会学とりわけデュルケム学派に傾斜し、卒業論文「エミル・デュルケムにおける宗教社会学理論」をまとめた。そして4年後には、デュルケムの『宗教生活の原初形態』上巻を訳出し、宗教社会学の草分け的存在となった人物である。

第2次世界大戦中の1943年に、文部省直轄の「民族研究所」が発足し、古野は第3部(中部・西部アジア)と第5部(東南アジア・インド太平洋圏)の部長を兼任していた。大学卒業後内藤先生は、民族研究所所員の牧野巽の助手として、同じ組織に所属していた。

戦後、古野は1948(昭和23)年に九州大学宗教学教授に就任しており、1950年の内藤先生の九州大学就任に関与したことが推測される。当時、古野は九州大学文学部に、社会学と宗教社会学の人文科学系の大学院「社会学コース」を構成することに尽力していたが、内藤先生もそれに協力するとともに、九州大学宗教学研究室との共同研究も強固なものとなった。

ところで、内藤先生の初期の研究論文をみると、1950年に社会学評論1巻2号に掲載された「中国家族の世代について——その問題と測定——」では、コムト(コント)に、1952年の社会学評論2巻4号に掲載された「年齢階級——特に漁村の若者組——」では、エルツの「死の表象」に触れておられ、若き時代の内藤先生がフランス社会学に関心を強く持っておられたことがよくわかる。それらの論文がフランス社会学に関する論文ではないにもかかわらず、フランスの社会学者についてひとこと触れておられることから、若き日の先生のペダンチックな側面をうかがうことができる。

さらに、古野の紹介で、1952年に、クセジュ文庫の1冊として、ジャン・メゾンヌーブ『社会心理』を翻訳出版しておられ、訳者のまえがきに「翻訳書出版について種々御尽力くださった九州大学古野清人教授と原稿の整理に当たられた同大学社会学研究室の諸兄とに謝意を表す」⁴⁾と記されている。

いずれにせよ、九州大学に着任した内藤先生は、古野清人を通じてE. デュルケムの社会学やフランス社会学に関心をもち、授業では、デュルケムはじめフランス社会学をとりあげられていった。九州大学赴任当初の卒業生たちは、内藤先生の研究テーマは「デュルケム」とははっきりと認知しており、卒業後の仲間同士の集まりに「デュルケム会」という名前を付

けていた。彼らが先生宅を訪問した際に、「九大デュルケム会」と書かれた宴会場の写真を見せたところ、「デュルケム会か—— フフッ!」と、先生独特の含み笑いと笑顔が返ってきたとのことである⁵⁾。

3. 九州大学におけるフランス社会学の授業

九州大学における社会学の授業は、「内藤莞爾の社会学 その3」で紹介したように、社会学講義は末子相続に関するものに集中していたが、社会学演習ではデュルケムの著作がテキストとして使われた。

デュルケムの『社会学的方法の規準』*Les Règles de la Méthode Sociologique*は、1895年に出版され、日本では昭和22年に、田辺寿利による翻訳が創元社から出版されていたが、絶版となっていた。筆者が社会学研究室に進学した昭和41年に、有隣堂出版から田辺寿利によるデュルケムの『社会学的方法の規準』が新たに翻訳出版され、41年後期の社会学演習のテキストとして、受講生皆で購入して用いることとなった。

本書は、社会学の対象は「社会的事実」で、社会的事実は個人の外部に存在し（外在性）、外側から個人を拘束する（拘束性）という特徴をもつことが述べられており、デュルケムの社会学方法論を知るための格好のテキストであった。

しかし、その演習は専門課程に進学してすぐの授業で、社会学の歴史も社会学の理論的特徴もまだ十分に学ぶ前のことで、授業は受講生が順番にテキストを読み進めるかたちで進められた。時折先生が、「そこは具体的に言うとどのようになるか」など質問されたが、答えられるものはなく、先生が解説されることに終始したように記憶している。テキストは購入したが、正直、デュルケムの社会学とは何かはわからないままであった。

次の学期に、デュルケムの『自殺論』*Le suicide* (1897)がテキストとして用いられることとなった。現在では宮島喬による現代口語訳の読みやすい翻訳が出版されているが、その当時は、昭和7(1932)年に寶文館から出版された、鈴木宗忠・飛澤謙一訳があるのみであった。現在では違法かもしれないが、先生がお持ちの鈴木・飛澤訳の『自殺論』をコピーして読むこととなった。

当時のコピーは湿式のコピーで、1頁ずつポジのネガフィルムを撮影して、現像したフィルムを乾かしたうえで、湿式コピー用の用紙と重ねてコピー機に差し込む作業を必要とした。手間暇かけて、いわゆる青刷りのコピーが完成することになる。

当時、社会学演習の受講生は15名で、1頁を作成するために、フィルムを15回コピー用紙とともにコピー機を通すことになる。1コマの授業のためには何頁ものコピーを必要とするために、社会学演習の授業は準備が大変であった。授業が終わると、先生から本をお借りして、次の週に用いるテキストをコピーしていった。

『自殺論』の演習は、このように物理的に時間をかけて受講したこともあるが、自殺という社会現象を取り上げて、社会的事実としての自殺の原因を、社会的事実でもって解明するために、自殺統計を用いて「共変法」で説明がなされていくこともあって、『社会学的方法

の規準』に比べれば、はるかに理解しやすいものであった。

しかも鈴木宗忠・飛澤謙一訳の『自殺論』は全訳で、社会学演習では、最初から少しずつじっくり読んでいった。原著者の序文にもあるように、デュルケムの社会学は、タルドの個人的・心理学的要素を含む社会学に真っ向から対抗するものであったが、自殺の社会学的原因や原因別の自殺類型については、自殺統計が不可欠であり、当時、「司法省統計課長タルド氏の非常な厚意によって、それを用いることができた」⁶⁾と謝意が表されている。授業中にも、内藤先生がそのことを強調しておられた。

『自殺論』では、緒論において、自殺の定義がなされ、集合的現象として自殺を扱うために、社会的自殺率を対象とするという本書の目的と、本書が、一般的に自殺の原因と考えられている非社会的要因、社会的原因と社会型、社会現象としての自殺一般について、の3編からなることが述べられている。授業の最初に、自殺とは何ぞや、自殺をどのように定義するかについて、熱のこもった意見交換をしたことがなつかしく思い出される。

『自殺論』の第1編は、のちに中央公論社から出版された宮島喬による翻訳⁷⁾では、わずか6ページの抄訳になっているが、あとで振り返ってみると、第1編は『自殺論』の中で最も面白い部分であった。第1章「自殺と精神異常」では、偏執狂、精神錯乱、神経衰弱、アルコール中毒といった現象の増減や分布と、性別、宗教別、年齢別、国別の自殺率の増減・分布とが同じような傾向に見られるかどうか考察され、結果的に関連がないことが示され、第2章「自殺と正常な心理的状态」では、たとえば人種や遺伝との関連が考察され、第3章「自殺と宇宙的要因」、具体的には、気候、温度、季節、月、昼間の長さ、時刻、曜日と自殺率との関連が考察され、結果的に、社会活動の激しい人や時間と自殺との関係に導かれていく。

すなわち、個人的現象と思われがちな自殺が、デュルケムのいう社会学の対象である社会的事実で、いわば個人に外在する社会的現象であることに納得せざるをえなくなるような論の進め方である。第1編の最後に、タルドの社会学を意識して、第4章「模倣」が設けられている。模倣は、個人心理学上の要因であって、フランスの郡県別自殺、中央ヨーロッパにおける自殺の地理的分布をみると、「自殺は、ある中心点を遠ざかると次第に減少していくというように、その中心点を中心として、多少同心円的に分布されていない……、反対に、大体同質的な、全く中心を欠いている大なる塊をなして分布して」⁸⁾おり、模倣の影響の存在はないとしている。

こうして自殺の非社会的要因をことごとく排除して、第2編の社会的原因と社会型が提示されていく。『自殺論』において一般的に最も興味をひかれるのは第2編である。社会的原因別の第1の自殺「利己的自殺」⁹⁾においては、自殺と宗教との関係、教育的程度との関係、家族との関係が独身、やもめ、子どものない家庭、平均員数に関して考察され、政治的・国民的危機との関係が考察されている。「自殺は宗教社会、家族社会、政治社会の集成度に反比例する」ことが明らかにされ、危機における集団の集成に関心がおかれている。

第2の自殺類型は「愛他的自殺」で、未開社会、軍隊を例にして、利己的自殺とは対照的

に、集団の集成が過度に強固な状況と自殺との関連が述べられている。

第3の「無統制的自殺」においては、経済上の危機において統制がきかなくなる状況が経済的無統制であるが、過度の経済的繁栄も経済的無統制を生み出し自殺率を高め、無統制は経済界においては慢性的になっていることを指摘している。また、やもめや離婚も自殺と関連しており、これらは家族的無統制である。無統制的自殺は集団における規範が拘束力をもたなくなっていることが原因で、これと対照的な、規範が拘束力を持ちすぎる自殺タイプも想定され、デュルケムは注において、第4の過度の統制から生じる「宿命的自殺」を提示している。

自殺論の最後の第3編において、自殺の現状は、「道徳的貧困の徴、社会の道徳的疾患で、個人と国家との間のすべての中間的集団が消失」していると述べ、自殺への対応として、中間集団を再興することが必要であるとしている。ただし地域的地方分権は意義を欠いてきており、「国民的統一を破壊しないで、共同生活の中心を増加させることのできる唯一の地方分権は職業的地方分権と呼ぶことのできる分権である」¹⁰⁾として、同業組合を組織することを提案している。

「自殺論」は、ここで終わっており、具体的な中間集団に関する考察は行われていないが、自殺の異常な増加と近代社会を冒している一般的不安は、中間集団の喪失という同一の原因から生じると、示唆的な指摘を行っている。

社会学演習では、1年間にわたって『自殺論』を読んだが、1頁ずつコピーをして資料を作成する作業もあり、丁寧に読んでいったこともあって、前期・後期の時間内には、最後まで読破するには至らなかった。しかしながら、受講生はみな『自殺論』を通じて社会学の面白さを感じており、授業終了後も先生に本をお借りしてコピーし、学生たちのみで自主的に最後まで読破した。その時に作成した「青刷りのテキスト」は、50年以上も経つと、ところどころ読み取れない状況になっているが、今ではある種の「宝物」となっている。

その後1960年代後半になると、世界的にも国内においても、大学における学生たちの異議申し立て運動が激化していった。九州大学も同様で、文学部においては1969年4月20日に、文学部の学生たちが文学部の建物をバリケード封鎖した。

筆者は、1969年3月に文学部を卒業し、4月より社会学研究室の助手に就任した。1か月前までは学生の身分であったが、バリケード封鎖した学生たちにとって、助手は「教官の手先」と位置付けられ、なんとも不安定な大学生活を過ごすことになった。

内藤先生にとっても、いわゆる大学紛争中は、研究教育に専念することが困難な時代であった。この間、内藤先生は「学者としての良心のほんのわずかななぐさめは翻訳」であったと述べておられる。その成果が、昭和47年に北川基金刊行会から出版されたR. エルツ、M. モースの『《死》の民族学』である。

その中で、「わたしがはじめてエルツの本に接したのは、東大の学生時代のことであった。ちょうどエルツが『死の集合表象』に興味をもちはじめたとしごろに当たる。感銘を受けた本のひとつではあったが、今にして思えば、読みすてにしたといった印象が強い。民族研究

所に在職中わたくしは華南からインドシナの民族研究を命ぜられ.....『洗骨』の風習には出会わざるをえなかった。こんなとき、ふとエルツのことを思い出すこともあったが、二重葬制のことは、ほかのモノグラフにたくさん出てくるので、エルツのイメージもうたかたのように消えてしまった」と。

ところが 30 年を経て、学園紛争の時、学者先生の良心のほんのわずかなぐさめは翻訳でもやるしかないと思い立ち、「青春の日々の感銘が、突然目を覚ましたという気持ちが強い」と述べておられる¹¹⁾。

1928 年に発表された R. エルツの「《死》の集合表象」は、1960 年に、Rodney and Claudia Needham 夫妻により、“*Dead and Right Hand*” の書名で、英訳が Cohen & West 書肆から出版された¹²⁾。

エルツの《死》の集合表象については、学生時代に下訳らしきものがなされていたものを、きちんと翻訳しなおされたようであるが、同じく本書に収められている M. モースの「《死》の集合的示唆」は、大学紛争後の翻訳である。

また 1971 年に、R. カイヨワの『聖なるものの社会学』を弘文堂から翻訳出版されているが、九州大学に在職中のフランス社会学への関心は、学生たちへの授業とこれらの翻訳に限られ、先生自身の実質的な研究は、いわゆる「末子相続」に集中されていたといえる。

4. 立正大学におけるフランス社会学研究

九州大学退官後、先生は東京の立正大学へ就職され、長年続けられたフィールド研究から文献研究へと研究スタイルを大きく方向転換された。「5 年前、立正大学に迎えられて、またフランス社会学との縁が生まれた。私の担当講座は理論社会学で、新明正道先生の後任であった。.....私は理論社会学者の器ではないので、フランス社会学史を手がけてみることにした」¹³⁾ と、自身述べておられる。

しかしながら、九州大学において日ごろの研究成果を文学部の紀要『哲学年報』に毎年発表してこられた姿勢は、立正大学においても継続された。立正大学における先生の研究を概観するために、立正大学の紀要に発表されたものを中心に、特にフランス社会学に関する論文に限定して列挙してみると以下のとおりである。ちなみに斜体の論文は、他大学の紀要論文と学会誌論文である。

1981 年 12 月 1 日 「『贈与論』その後：マルセル・モース研究」『立正大学文学部論叢』(71)3-26 頁

1982 年「デュルケム学派の実像：L' Année sociologique の分析をとおして」『立正大学人文科学研究所年報』(20)50-60 頁

1982 年「モースにおける『全体人』の構成」『日本大学社会学論叢』第 84 号

1982 年「『贈与論』への道」『立正大学社会学・社会福祉学論叢』第 17 号

- 1983 年 1 月 20 日『社会学年報』事始』『立正大学文学部論叢』(75)35-54 頁
- 1983 年「晩年のデュルケム(上)」『立正大学人文科学研究所年報』(21)46-54 頁
- 1983 年 12 月 15 日「デュルケムにおける宗教概念の形成(1)」『立正大学文学部論叢』(77)61-82 頁
- 1984 年 1 月 25 日「<論説>デュルケムにおける宗教概念の形成 (2)」『立正大学文学部論叢』(78)35-58 頁
- 1984 年「晩年のデュルケム(下)」『立正大学人文科学研究所年報』(22)1-10 頁
- 1984 年「デュルケム学派における一般社会学と文明——デュルケムからモースへ (1) ——」
社会学年報 (九州大学社会学会) 第 13 号
- 1985 年「デュルケム学派における一般社会学と文明——デュルケムからモースへ (2) ——」
社会学年報 (九州大学社会学会) 第 14 号
- 1985 年 2 月 28 日「モース社会学の構図」『立正大学大学院紀要 (文学研究科)』第 1 号
- 1985 年 内藤莞爾・阿部善雄・三友雅夫「贈与の理論的実証的研究：中間報告」『立正大学人文科学研究所年報』(23)95 頁
- 1986 年 3 月 20 日「マルセル・モースの知的生涯」『立正大学文学部研究紀要』(2)5-47 頁
- 1986 年 内藤莞爾・三友雅夫・井上隆二「テーマ“贈与”の理論的・実証的研究：中間報告」『立正大学人文科学研究所年報』(24)62 頁
- 1987 年 内藤莞爾・三友雅夫・井上隆二「贈与の理論的・実証的研究：中間報告」『立正大学人文科学研究所年報』(25)39-40 頁
- 1990 年 12 月 18 日「まえがき 方法論的ノート」内藤莞爾・三友雅夫・井上隆二『贈与の理論的実証的研究』『立正大学人文科学研究所年報』別冊(7)2-9 頁
- 1990 年「デュルケム学派における超『社会』現象の処遇」『久留米大学比較文化研究科紀要』第 1 輯
- 1990 年『社会学年報』の構成と犯罪社会学の処遇 (上)』『社会分析』(社会分析学会) 第 18 号
- 1991 年『社会学年報』の構成と犯罪社会学の処遇 (下)』『社会分析』(社会分析学会) 第 19 号
-

これらのフランス社会学に関する論文を集めて、1985 年に『フランス社会学断章——デュルケム学派研究』(恒星社厚生閣)を出版された。フランス社会学と銘打っておられるが、デュルケムとモースに関する論稿が中心で、デュルケム学派を眺めるためにはこの 2 人が効果的であると考えておられたようである。

当時、T. クーンの科学史の「パラダイム転換」が注目を浴びていることに刺激されてか、第 1 章に、学派や研究集団に観点を置いた社会学の展開に関する「デュルケム学派の実像」が置かれている。この章は、Y. ナンダンによって作成されたデュルケム学派の文献総目録

(1977 年) と、それを分析した P. ベナールの論文 (1979 年) に大きく依拠している。章末には、デュルケムを筆頭に 47 名の『社会学年報』の作業集団一覧表が掲載されている¹⁴⁾。

デュルケムのあとを継承した、フランス社会学の歴史を考察するにあたって、先生はフランスの社会学雑誌に掲載された論文を渉猟して考察を進めておられる。それらの論文は 1970 年代のものが多く、九州大学在職中に読んでこられたものであると思われる。それらを手がかりに立正大学時代に次々と論文の形にしていかれたようである。ただ、先生は、それぞれの論文を評価するのではなく、彼らの立場に立ってそれらの論文を紹介するという姿勢に徹しておられる。

これが内藤先生の研究スタイルであると思われるが、フランス語が苦手なものにとっては、フランス社会学の動向を客観的に知るためには、大いに役立つものであるといえる。

ここでは、フランス社会学の歴史や、デュルケムのあとを継いだ M. モースやその後の社会学年報にかかわる社会学者について、先生がどのように論じてこられたかを改めてまとめることは筆者の能力を超えるところもあり、先生自身が論文をまとめて著書の形で刊行しておられるので、あえて整理することは行わない。

『フランス社会学断章』後、1988 年に『フランス社会学史研究——デュルケム学派とマルセル・モース——』(恒星社厚生閣)、1993 年に『デュルケムの社会学』(恒星社厚生閣)、1994 年には『デュルケムの近代家族論』(恒星社厚生閣)を、次々と著書の形にして出版されており、内藤先生のフランス社会学・フランス社会学史に関する研究内容については、それらを参照していただきたい。

ただ、「宗教概念の形成に関する論考」をみても、デュルケムの「近代家族論に関する考察」をみても、先生は突き詰めたところ『自殺論』に手がかりを求められており、デュルケムが『自殺論』で用いているデータを、先生なりに再整理しておられる。やはりフランス社会学を論じるにあたって、『自殺論』は先生にとっても最も重要な著作であったことがうかがわれることは特記しておきたい。

思うに、先生が立正大学時代に、デュルケムやフランス社会学に関して、あれこれ思いを巡らせておられた時間は、先生にとっては至福の時であったと思われる¹⁵⁾。

5. 「贈与」の理論的・実証的研究

立正大学時代の晩年、昭和 60 年より、先生が代表者となって、史学部門(阿部善雄)、心理学部門(井上隆二)、社会学・社会福祉部門(三友雅夫)で、共同研究「贈与現象の理論的・実証的研究」に着手された。何といてもモースの最高傑作¹⁶⁾であると先生がいわれる、「贈与論」を念頭に置いての研究で、先生は『贈与』概念を明らかにする理論的研究を受けもっておられた。先生の言葉によると、理論といってもマーソンの不熟な用語「中範囲の理論」に近い¹⁷⁾、実証的研究を進めていくための理論的枠組みを提示しておられる。

まず贈与を交換の一種と考え、最終的には 2 人の当事者間の財の交換で、財は、物財に限らず、労働・サービス・献身などの肉体的な所作、是認・尊敬・賞賛などの制度的事実、行

為・愛情などの心理=情緒的事実までが含まれるが、社会学でいう交換は社会的交換に限られる。A 表の 1 は、物財を与えて、物財で返すタイプであるが、当事者が物財の交換に人間関係への意味を持たせるなら、それは社会的交換となる。B 表の d は、人間関係の考慮がなければ対象とはならない。

A 表			B 表		
交換財	当事者 A	当事者 B		当事者 A	当事者 B
1	物	物		物	物
2	物	非物	a	情緒	情緒
3	非物	物	b	用具	情緒
4	非物	非物	c	情緒	用具
			d	用具	用具

このように、交換を整理したうえで、交換の一形態としての贈与に関して、贈与は物と物の相互移転であるが、「贈与」を、有賀喜左衛門による「公」と「私」の価値体系を用いて、「贈答」と「つきあい」に区別する。

C 表に示したように、贈答とつきあいの違いは明瞭で、「贈答」はハレの日のハレの場所で行われ、ムラの生活では公として承認されていた。こうした贈答は、個人を超えた家や地域社会でなされ、義理というモラルが支配する。その行為は強制的、他律的となる。

C 表						
贈与	宗教	社会	道德	論理	行為 I	行為 II
贈答	ハレ(聖)	公	義理	タデマエ	強制的	他律的
つきあい	ケ(俗)	私	人情	ホンネ	任意的	自発的

これに対してつきあいは、日常的な、おすそわけ、およばれ、寸借といった行為で、人間性のホンネに属するものであると整理しておられる。

この共同研究の質問票を用いる調査では、つきあいは調査項目の選定が困難ということで、便宜的に物財の贈答に限って行われることとなった。具体的には、甲府盆地の西縁にある中巨摩郡の白根町において、日本的な特徴である年中行事と推移儀礼の贈答から 11 項目が選ばれ、世帯主もしくは主婦に対して面接法で悉皆調査がなされた。残念ながら、昭和 62 年 3 月で定年退職をむかえられた先生は、参加されたかったに違いないが、この調査に参加することはできなかった。

方法論ノートの中で、内藤先生は「蛇足と思われるが、.....東西文化の差異が感じられる」として、「キリスト教下の西欧では、贈与すなわちあたえることに、独立の価値を認め

ている、いわゆる＜善行＞のたぐいである。神は絶対的であるとともに、人間はもともと原罪であり、人間は負目を持った存在として規定された」¹⁸⁾。人は神に対して己の持つものをささげなければならないが、神から反対給付を期待するなどあろうはずがない。

これに対して、日本人は、給付にも反対給付を期待している。お返しをしないことは、道徳的に悪とされた。報恩は無限で、子々孫々に至る義務とされたと、東西の比較を行っている。西欧では与えることは善行で、日本では返すことが礼である、と述べておられる。

このように、フランス社会学者モースの贈与論から導き出された作業仮説を想定するに際しても、東西の宗教や道徳に根差した行為の比較に関心を示しておられ、内藤社会学の根底に横たわる、比較宗教社会論の存在を感じることができる。

6. 総括：内藤莞爾の社会学に通底するもの

内藤先生は、1978年に、宗教社会学に関する論文をまとめて『日本における宗教と社会』を出版されている。その第1章には、周知の卒業論文「浄土真宗と近江商人」が改稿されて収録されている。第2章と第3章は、大学院の学生であった先生が、この卒業論文をきっかけに、本派（西派）本願寺に属する「日本教学研究所」の嘱託になり、執筆された論文である。「宗教講の問題」は、昭和18年に刊行された『日本教学研究所研究報告』第3輯に収録された論文で、「宗教講」の変遷を、当初、近世までたどる計画であったが、第2次世界大戦に突入して、中世までしか報告ができなかった¹⁹⁾とのことである。戦後まもなく、現在の念仏講を確かめるために北陸で調査をした際の報告が「北陸念仏講調査記」である。

九州大学に着任されるまでは、先生の関心はもっぱら宗教現象にあった。その後九州大学においては、人類学・宗教社会学研究室との共同研究を行っておられ、末子相続の調査研究に没頭しておられるときも、カトリックやキリシタンの居住する地域に、いわゆる末子相続の慣行がみられることに注目し、仏教徒の居住地域との比較をしておられる。

先生自身も「初期の固有の宗教現象の研究から家族研究へと移行したが、『宗教』は、のちになっても、いわば『赤い糸』をなしていた」²⁰⁾と述べておられ、日本の社会における宗教のあり方が、社会にどのように投影されているかを追究しておられた。

先生は授業中に、最近の若い者は「宗教」に関心をもつものが少なく、宗教の分野を研究するものはいないことを残念がっておられたが、学問分野にはやはりすたりがあり、そのうち宗教研究も脚光を浴びる時がくるとも言われていた。

確かに「浄土真宗と近江商人」は、ベラーが参照したこともあり、思いがけず多方面に取り上げられた時期があった。その後、近江商人の売り手よし、買い手よし、世間によしの「三方よし」の経営理念は、近代的企業の経営理念としても取り上げられることがあるが、浄土真宗との関連について取り上げられることはなくなったかに思われる。

ところで、山口県防府市に円通寺という浄土真宗の寺院がある。2019年に亡くなられた住職の児玉識先生は、京都大学文学部で哲学・宗教史を学ばれ、山口県内の高校や水産大学校で勤務しながら、西日本地域における近世の真宗史の研究を進められ²¹⁾、1998年より浄

土真宗とかかわりの深い龍谷大学文学部教授に就任され、2005年に博士論文『近世真宗と地域社会』²²⁾を提出された。

児玉先生は、近世の真宗史を研究する際に、これまでの宗教史の研究とは異なる地域社会における宗教集団に視点をおいて研究を進められ、『近世真宗の展開過程 西日本を中心として』において、森岡清美の『真宗教団と「家」制度』（1962）に大きく触発されたことを述べておられる。森岡清美は『真宗教団と「家」制度』において、内藤先生の卒業論文「浄土真宗と近江商人」について、真宗の門徒の信仰が商人の間にも浸透していったことを物語る優れたモノグラフである」と紹介しておられる²³⁾。同じく児玉先生も、内藤先生が真宗のエートスを近江商人に関して取り上げて、真宗が西欧のプロテスタンティズムに対する日本における最も類似性を持つ形態とされた点を評価しておられる。さらに、内藤先生が富山県の下新川郡の真宗念仏講を調査した際の調査記録である「北陸念仏調査記」にも注目しておられる²⁴⁾。

たまたま筆者が、防府市のローカル紙『ほうふ日報』に掲載している「社会学者の眼」に、論文「内藤莞爾の社会学」を執筆していることをつぶやいた²⁵⁾ところ、児玉先生が、ぜひ論文を送ってほしいと連絡してこられた。「内藤莞爾の社会学 その1」²⁶⁾をお送りしたところ、児玉先生は、「若かりし頃、九州大学で宗教学の学会が開催され出席した折に、内藤先生に会ったことがある。内藤先生の浄土真宗と近江商人の研究は、大変素晴らしいものであるが、その後それを受け継いで研究しておられる方はあるのか」と尋ねてこられた。

その時は、「残念ながらおられないと思います」とお返事したが、2020年に、龍谷大学の窪田和美著『近江商人の生活態度——家訓・倫理・信仰』（法蔵館）が出版され、求めて読んでみると、窪田は、内藤先生の「浄土真宗と近江商人」に触発され、内藤論文に欠けていた部分を補完することを目的として、実証的研究を進めてきたとのことで、本書はそれをまとめたものであった。

内藤先生の論稿は、近江商人の生活態度が浄土真宗という宗教倫理から影響を受けていることに焦点をおいているが、『近江商人の生活態度』は、近江という地域性が、近江商人の生活態度を形成していることを明らかにする目的で執筆された大変興味深いものであった。その中に、内藤先生が、1990年に龍谷大学に招聘されて講演を行われたことが明記されていた。内藤先生は、卒業論文を執筆する際に一度も近江の国に足を踏み入れられたことはなかったが、「講演のために龍谷大学を訪問した際に、龍谷大学大宮学舎の図書館に何日も通われ、宗教の専門書や説教本を読み漁り、ある書物の一か所を探し当てられ、『助かった』と笑顔で語られたことを思い出した」とあった²⁷⁾。

内藤先生が1990年に龍谷大学に招聘されて行われた講演内容は、窪田によって克明に記録紹介されている²⁸⁾。龍谷大学瀬田学舎の地域総合研究所（現 国際文化研究所）では、当時5か年の調査プロジェクト「地域社会の生活構造と住民意識の動態研究」に取り組んでおり、その調査研究の対象地が、滋賀県神崎郡五個荘町（現東近江市）で、近江商人発祥の地のひとつであり、内藤先生が「宗教と経済倫理」で近江商人について論じておられるこ

とから、その研究成果を学ぶことと、龍谷大学が浄土真宗の宗門大学であることとを機縁として、1990年11月に内藤先生を招聘されたという。

その時の講演テーマは「近江商人と浄土真宗——比較社会学的試論——」である。講演のはじめに、浄土真宗や近江商人の話をするには50年前の古証文を披露することになると、講演の内容が卒業論文に依拠していることを述べておられる。また副題にある「比較社会学的試論」は、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』から論文の構想が得られたことから、東西宗教の比較を念頭に置いてつけられたものであるとのことである。

講演記録をみると、講演は卒業論文に忠実に進められたようである。真宗の教義と門徒の生活態度および職業生活の宗教的意味づけは、真宗側のデータに依拠したが、教義が商人階層に浸透していった世俗的な形を問題として扱う際には、「説教本の類」をデータとしてフルに使ったとのことである。幸い龍谷大学は400年焼けていない。龍谷大学の図書館に行けば説教本は残っているので、ご覧いただきたいと述べておられる²⁹⁾。講演に招聘された折に、何日も図書館通いをされたのは、自分が論文に使った資料が龍谷大学の図書館にあることを確認されたかったのではなかろうか。

ところで、龍谷大学の講演テーマの副題に、東西宗教の比較社会学的試論と付されているように、内藤莞爾の社会学には、宗教と社会のかかわりとともに、西欧のキリスト教と日本の仏教との対比という視点が通底していたといえる。晩年において、フランス社会学者モーアの「贈与」から導き出された仮説を、日本農村において検証する際にも、キリスト教と仏教に見られる価値規範の対比を念頭に置いておられたことも一つの証拠である。

50年以上にわたる内藤社会学に通底するものは、まさにこの宗教と社会のかかわりにあったことを確信することができる。あえて推測すれば、仏門に生まれながら学者の道を歩む人生を選択した内藤先生の、せめてもの仏教界に対する罪滅ぼしとでもいえ、日本の宗教に対するささやかな貢献のつもりであったのではなかろうか。

社会調査協会の『社会と調査』のコラム「社会調査の達人」に、内藤莞爾についての執筆依頼を受けて原稿を執筆するとともに³⁰⁾、それを機に、内藤先生の研究史を自分なりにまとめてみたいと思い立ち、「内藤莞爾の社会学 その1」を書き始めた。毎年少しずつ書き進め、本論はその「総括」である。

7. エピローグ

九州大学において内藤社会学から学んだことは何であったのであろうか。個人的には『自殺論』で学んだ自殺の社会的要因としての「アノミー」は、自殺を増加させるのみならず現代社会の特徴として惹きつけられるものがあり、卒業論文『アノミー理論の現代的課題——社会的・心理的アノミーの統合を求めて——』を取りまとめることができた³¹⁾。

卒業論文は、内藤先生から学んだデュルケムの社会学を越えようという目論見もあったが、その後の研究は、先生には申し訳ないがフランス社会学にも宗教社会学にも向かわなか

った。ただ、企業の社会的貢献に関する研究は、近江商人の「三方よし」の経営理念に通ずるものもあり、ささやかながら内藤社会学の研究の一端を継承しているつもりである。

大学紛争後の九州大学社会学研究室は、多くの学生や大学院生の集まる場所であった。学生の家族から寄せられた「北川基金」によって、九州大学社会学会が設立され、隔月、研究例会が行われていた。大学院生が主に研究報告をするのであるが、先生方からは毎回厳しいご意見をいただき、大変緊張する場であった。とりわけ内藤先生の批評は、的を射た独特の言い回しで、例えば、論点が整理されていないと「五目飯だ」とか、2人の共同報告がうまく連携されていないと「ピントのズレた二眼レフだ」など、その当時は、「内藤語録」を作成したら面白いだろうと思っていた。

大学院生も多く、学部学生とソフトボールの対抗試合ができるほどであった。写真は昭和48年ごろの社会学研究室の学生対大学院生のソフトボール大会後のひと時である。この写真に写っている大学院生の多くは、大学院修了後、社会学研究者としての道を歩み、定年退職を迎えている。内藤莞爾先生に教えを受けたものを代表して、先生に心よりお礼を申し上げたい。



前列左から3人目のネクタイ姿が内藤莞爾先生。その右隣りが筆者。

[注]

- 1) 内藤莞爾、1985『フランス社会学断章』厚生社厚生閣、218 頁。
- 2) R. N. ベラー、堀一郎・池田昭訳、昭和 41 年『日本の近代化と宗教倫理——日本近世宗教論——』未來社。
- 3) 内藤莞爾、2003「九州 50 年 よもやま話」『九州人類学会報』30、1 頁。
- 4) ジャン・メゾンヌーブ、内藤莞爾訳、1952『社会心理』白水社、4 頁。
- 5) 昭和 31 年卒 水野淳、昭和 32 年卒 谷口宗文、昭和 33 年卒 石尾正、平成 24 年「九大デュルケム会」『内藤莞爾先生の思い出——追悼文集——』58 頁。
- 6) デュルケム、鈴木宗忠・飛澤謙一訳、昭和 7 年『自殺論』實文館、XVII 頁。
- 7) デュルケム・宮島喬訳、昭和 43 年「自殺論——社会学的研究」尾高邦雄責任編集『世界の名著 47 デュルケム・ジンメル』中央公論社、49-379 頁。
- 8) デュルケム、鈴木・飛澤訳、145 頁。
- 9) それぞれの自殺は、宮島訳では利己的自殺が「自己本位的自殺」、愛他的自殺が「集団本位的自殺」、無統制的自殺が「アノミー的自殺」と翻訳されている。
- 10) 前書、512 頁。
- 11) R. エルツ／M. モース 内藤莞爾訳、1972『《死》の民族学』127-128 頁。
- 12) R. エルツ「右手の優越：宗教的両極性の研究」は、吉田禎吾・内藤莞爾・板橋作美訳、1980、垣内出版に収録。
- 13) 内藤莞爾、1985『フランス社会学断章——デュルケム学派研究』恒星社厚生閣、218 頁。
- 14) 同上、21 頁。
- 15) 「内藤莞爾の社会学 その 3」（『やまぐち地域社会研究』17 所収）を、内藤先生の次女の佐藤明代さんにお送りしたところ、「社会学その 3」をお送りいただき、ありがとうございました。「その 4」は東京立正大編とか。九州にいたときよりも、おだやかで、楽しそうだった父の顔を思い出しました。というお返事をいただいた。（2020 年 4 月 2 日付）
- 16) 内藤莞爾、1988『フランス社会学史研究』恒星社厚生閣、iii 頁。
- 17) 内藤莞爾、1990 年 12 月 18 日「まえがき 方法論的ノート」内藤莞爾・三友雅夫・井上隆二「贈与の理論的実証的研究」『立正大学人文科学研究所年報』別冊、2 頁。
- 18) 同上、8 頁。
- 19) 内藤莞爾、1978『日本の宗教と社会』御茶の水書房、264 頁。
- 20) 同上、2 頁。
- 21) 児玉識、1976 年『近世真宗の展開過程 西日本を中心として』吉川弘文館。
- 22) 児玉識、2005『近世真宗と地域社会』法蔵館。
- 23) 森岡清美、1962『真宗教団と「家」制度』創文社、70-71 頁。
- 24) 児玉識、前掲書（2005）19 頁、205 頁、209 頁。
- 25) 小谷典子、「大学図書館」『ほうふ日報 社会学者の眼 66』平成 30 年 2 月 28 日付。
（次頁 参考資料）

社会学者の眼

66

大学図書館

山口大学名誉教授 小谷典子



藤莞爾「先生の「社会学」の全体像をまとめてみよう」と思い立った。

先生は、日本社会学会会長も務められ、日本社会学界を代表する先生であるが、私が山口大学を定年退職した年に、94歳でなくなられた。私は大

生、助手などの身分で、山口大学に就職するまでの13年間を先生ののもとで学んだ。

比較的まじめな学生であつたので、先生の授業を欠席したことは1度もないし、先生が出版された本はほとんど手元にある。しかし、先生の学問の全体像を知るために、先生は、日本社会学会論文や若い時代に書かれたものにも目を通す必要がある。

幸い山口大学経済学部には、旧制高等商業学校時代の書籍が東亜館の蔵書として所蔵されてお

り、「貴重図書」の中に先生の論文を見つけないことができた。晩年、私の本を何冊も刊行されてお

り、それらはご家族から貸していただいた。

大量の雑誌論文を入手するために、退職後はしばらくごぶさたしていた大学図書館をたずねた。

現職の時には、職員の手でDカードを使って図書館に入館していたが、まず「図書館利用カード」を作ることから始めた。

山口大学図書館は、この利用カードを作成して

もらうと、誰でも図書館にある本を読むことも、借りることもできる。大

学の施設の中では、最も地域の人のびとになじめる施設となっている。あるとき「このごろの学生は図書館を利用していませ

ばかりが目立ちます」と聞いたことがある。

大学のそれぞれの学部や研究室には、専門分野の本を所蔵する書庫などがあり、「学生たちの多くはその本を読んでいる」とは言う

くは、その本を読んでいる生にとつて、大学図書館はどのような場所になっているのであろうか。

50年ほど前、試験が終

わると好きな本が読める

と毎日のように図書館通

はどのようになつて

- 26) 三浦典子、2018「内藤莞爾の社会学 その1——社会調査への誘い——」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）15号、1-16頁。
- 27) 窪田和美、2020『近江商人の生活態度——家訓・倫理・信仰』法蔵館、21頁。
- 28) 窪田和美、2015「『近江商人と浄土真宗——比較社会学的試論——』をめぐって」『龍谷大学論集』48号、117頁。
- 29) 同上、124頁。
- 30) 三浦典子、2019「column 調査の達人 内藤莞爾——村落研究から末子相続研究へ——」『社会と調査』No.22、120頁。
- 31) 三浦典子、1969「アノミー理論の現代的課題——社会的・心理的アノミーの統合を求めて——」卒業論文。概要版、1969年4月『九州大学新聞』（九州大学新聞部）第592号所収。

所属：山口大学名誉教授

E-mail アドレス：otani@yamaguchi-u.ac.jp